

## 簿記 1 級における過去問練習の流れ

簿記 1 級に合格するためには過去問練習が非常に大切です。過去問練習なしで合格するのはほとんど不可能と言えるほどです。過去問練習は最低でも過去 10 回分を 5 回解きましょう。問題集だと思って繰り返し解いてください。

過去問練習は次の流れで行います。

1. 簿記革命 1 級の「商業簿記・会計学」まで完了する。
2. 簿記 1 級の過去問に取り組める状態を作る。
3. 過去問題集を入手する。
4. 「商業簿記・会計学」の過去問の 1 回目を解く。
5. 「商業簿記・会計学」の過去問の 2 回目以降を解いていく。
6. 簿記革命 1 級の「工業簿記」が終了したら「工業簿記」の過去問を解く。
7. 簿記革命 1 級の「原価計算」が終了したら「原価計算」の過去問を解く。

### 1. 簿記革命 1 級の「商業簿記・会計学」まで完了する

まずは簿記革命 1 級の「商業簿記・会計学」の学習を完了させます。完了する前に過去問に挑戦しても構いませんが、非常に大変なので「商業簿記・会計学」の学習が終わるまでは過去問練習は始めないことをお勧めします。

### 2. 簿記 1 級の過去問に取り組める状態を作る

【簿記革命 1 級】の「商業簿記・会計学」の学習を完了させたからといって、すぐに過去問に挑戦するのは無謀です。過去問に挑戦する前に次の 2 つを行ってください。

- 簿記 2 級の過去問のうち第 1 問から第 3 問までを完璧にする。
- 【簿記革命 1 級】の「商業簿記・会計学」の目次をチェックする。

#### 簿記 2 級の過去問のうち第 1 問から第 3 問までを完璧にする

簿記 2 級の過去問のうち第 1 問から第 3 問までが商業簿記となっています。まずはここが完璧にできるかどうか確認しましょう。ここが十分に解けないのに簿記 1 級の過去問に挑戦するのは無謀です。

「完璧」とは具体的には次のような出来具合を意味します。

- 比較的容易な回の場合：40 分以内に満点
- 比較的難解な回の場合：50 分以内に 9 割以上<sup>1</sup>

<sup>1</sup>時々非常に難しい回がありますが、そのような回は 8 割程度でも大丈夫です。

簿記 1 級の学習に入る前に簿記 2 級までを完璧にしている方も多いたと思いますが、【簿記革命 1 級】では総合問題は意図的に少なくしていますので、集計力が落ちている可能性があります<sup>1</sup>。自信がある方も一度はチェックしておくことをお勧めします<sup>2</sup>。

数回分解いてみた平均が「40 分以内」で「9 割以上」であれば簿記 1 級の過去問に挑戦できるだけの基礎が身についていると言えます<sup>3</sup>。

## 【簿記革命 1 級】の「商業簿記・会計学」の目次をチェックする

【簿記革命 1 級】の「商業簿記・会計学」の目次をざっと見て、忘れていた論点や出題されたら解けなさそうな論点がないかチェックします。簿記革命のカリキュラムどおりきちんと復習していれば心配ありませんが、3 回目（1 週間後の復習）より先の復習をしていない場合、最初の方で勉強した内容は思い出しにくい状態になっているかもしれません。

もし「忘れていた」「解けなさそう」という論点がいざ思い当たった場合はテキストや問題集に戻って確認してください。きちんと理解しながら勉強を進められていれば完全に忘れてしまっているということはありません。しばらく触れていないことで思い出しにくくなっているだけです。軽く復習すればすぐに思い出せます。

【簿記革命 1 級】の内容がきちんと身につけていない状態で過去問に挑戦するのは無謀です。【簿記革命 1 級】の内容を確認してから過去問に挑戦しましょう。

## 3. 過去問題集を入手する

過去問練習を始めるためには過去問題集を入手しなければなりません。過去問題集はおおよそ試験日の 1 ヶ月後に最新版が発売されます。どこの出版社でも構いませんので、10 回分以上収録されている過去問題集を入手してください<sup>4</sup>。

## 4. 「商業簿記・会計学」の過去問の 1 回目を解く

### 過去問を解く前のポイント

いよいよ過去問練習に入っていきます。過去問を解く前に次の 2 つを意識してください。

- 問題を解く時には必ず時間を計る
- 出来が悪くても落ち込まない

<sup>1</sup>簿記 1 級の総合問題の練習は過去問で必要十分だと考えているからです。

<sup>2</sup>問題は以前受けた簿記 2 級の過去問で構いません。

<sup>3</sup>もしこの条件に届かない場合、簿記 2 級の過去問を繰り返し解いてください。ちなみに、2 回目以降は難易度に関わらず「35 分以内」に「満点」が「完璧」の条件です。

<sup>4</sup>過去問題集は【簿記革命】には付属しておりませんので、各自お買い求めください。

### 問題を解く時には必ず時間を計る

過去問を解くときには必ず時間を計ってください。時間内に解こうとする必要はありません。制限時間がきたら気づけるようタイマーを設定しておいてください。時間が来てもしっかり解き続けて構いません。きちんと時間を計ることが重要です。時間を計ることで、時間感覚が体感で身についてきます。

### 出来が悪くても落ち込まない

過去問を解いてできが悪くても落ち込んではいけません。最初のうちは時間内に終わるわけがないと思ってください。難しく時間が足りないのは当たり前です。合格点に届かないのも当たり前です。解く前にこの心構えを作っておいてください。

## 過去問を解いていくときのポイント

過去問を解いていくときは次の2つを意識してください。

- 全ての問題の仕訳だけを切る（計算問題<sup>2</sup>）
- あまりにも早くあきらめない

### 全ての問題の仕訳だけを切る（計算問題）

1 回目の段階では集計して記入する必要はありません。まずは仕訳だけを切りましょう。集計力については「簿記2級」が完璧であればすぐに集計できるようになるので、この段階では仕訳を切ることに集中してください。

### あまりにも早くあきらめない

過去問は難易度が高いので、早々とあきらめてしまいそうになるかも知れません。もちろん【簿記革命】で全く勉強していない論点で、本当に手も足も出ないのなら諦めて構いません。しかし、学習した内容であるにも関わらず、問題文の言い回しなどに気持ちで負けてあきらめるのははいけません。

そういった諦めの姿勢は悪いクセになってしまい、本試験でも出てしまう可能性があります。

## 答え合わせをするときのポイント

解き終わったら答え合わせです。答え合わせのときには次の2つを意識してください。

1. 「商業簿記」「会計学」がそれぞれ18点以上取れているか確認する
2. もし取れていなければ取るべき問題を見抜いて「テキスト」「問題集」で復習する<sup>3</sup>

<sup>1</sup>制限時間はおおよそで構いません。商業簿記が60分、会計学が30分が一応の目安です。

<sup>2</sup>会計学で金額のみを計算する問題の場合は仕訳を切る必要はありません。

<sup>3</sup>通常は1回目の過去問練習で18点は取れません。18点に遠く及ばなくても心配しないでください。

## 1. 「商業簿記」「会計学」がそれぞれ 18 点以上取れているか確認する

「商業簿記」「会計学」がそれぞれ 18 点以上取れているか確認してください。18 点は満点の 72% で、ギリギリ合格という点数なので余裕がないのではないかと思われる方もいらっしゃると思います。しかし【簿記革命】で勉強された方は 18 点を目指せば十分だと考えてください<sup>2</sup>。

## 2. もし取れていなければ取るべき問題を見抜いて「テキスト」「問題集」で復習する

もし 1 回目の過去問練習から 18 点が取れていれば素晴らしいことです<sup>3</sup>。合格はかなり近いと考えてください。逆に 18 点に届いていなかった場合、何とかして 18 点に届かせなければなりません。そこで、取らなければならない 18 点を見抜くため、取らなくてもいい 7 点を見つけます。

取らなくてもいい問題は次のどれかにあてはまった問題です。

- 【簿記革命】で全く学習していない問題
- 非常に複雑な計算が必要な問題
- 他の解答欄がほとんど完璧に埋まらない限り正解できない問題

### 【簿記革命】で全く学習していない問題

【簿記革命】にはきちんと身につけなければならない論点は全て含まれています。逆に言うと、【簿記革命】で全く学習していない問題は「重箱の隅をつついた問題」だと考えて捨ててしまって構いません。

ただし【簿記革命】では全く学習していない内容であっても、簿記の考え方が身につければ解答できる問題の場合は得点しなければなりません。

### 非常に複雑な計算が必要な問題

【簿記革命】で学習した内容であっても、計算が非常に複雑で、正確な金額を求めるのが難しい問題もあります。こういった問題は得点しなくても構いません。

### 他の解答欄がほとんど完璧に埋まらない限り正解できない問題

簿記の総合問題では「他の解答欄がほとんど完璧に埋まらない限り正解できない問題」があります。例えば次の解答欄です<sup>4</sup>。

- 繰越利益剰余金（当期純利益）：全ての収益と費用が求まらないと解答できない

<sup>1</sup>仕訳だけを切っているだけで、そのまま採点はできません。「解説の仕訳と自分の仕訳を比較して間違っていた場合、その間違いが影響する解答欄を不正解にする」という形で採点してください。

<sup>2</sup>理由は「～Column～簿記革命で学習した人は各科目 18 点を目指せばいい理由」でお伝えします。

<sup>3</sup>この項の作業は必要ありません。「5. 「商業簿記・会計学」の過去問の 2 回目以降解いていく」に進んでください。

<sup>4</sup>あくまでも一例です。問題によってはこれら以外にもあります。

- 法人税等：全ての収益と費用が求まらないと解答できない<sup>1</sup>
- 法人税等調整額<sup>2</sup>：税効果会計に関する全ての金額が求まらないと解答できない

こういった解答欄で正解するのは本試験ではまず不可能です。最初から取ろうとしないことをお勧めします。

これら3つ合計で最大7点分を見積もってください。そして、それら以外の18点分についてはテキストや問題集に戻ってきちんと確認してください<sup>3</sup>。その問題を解くために必要なものを分析し、きちんと身につけることが大切です。

## どうしても18点分を確保できない場合

「簿記革命で全く学習していない問題」「非常に複雑な計算が必要な問題」「他の解答欄がほとんど完璧に埋まらない限り正解できない問題」を除いた点数が18点にどうしても届かないことがあるかもしれません。その場合、次の4つを確認してください。

- 【簿記革命】での勉強が暗記になっていないか
- 計算力が簿記1級のレベルに届いているか
- 理論問題が極端に解けない状態になっていないか
- その回の問題が特別に難しいのではないか

### 【簿記革命】での勉強が暗記になっていないか

勉強が暗記になっていれば、それだけ「簿記革命で学習した内容」の範囲が狭くなってしまいます。応用が利かないことで、少しの違いが「学習していない内容」に含まれてしまうからです。暗記になればなるほどわずかな変化にも対応できないのです。もし18点どころか15点にも届かないことが多い場合は暗記中心になってしまっている可能性が高いです。

### 計算力が簿記1級のレベルに届いているか

簿記1級の計算のレベルは簿記2級までとは比べ物にならないほど高まります。特に「割引計算」は簿記2級までは特に行わない計算で、難易度が高いです。

本当に複雑なものであれば得点を狙わなくても構わないのですが、「非常に複雑な計算が必要な問題」を増やしすぎてしまうと、その分取れる点数が少なくなります。

「非常に複雑な計算が必要な問題」が多いと感じる場合は、計算力が簿記1級のレベルに届いていないことが考えられます。その場合、自分の苦手な計算をしっかりと練習して克

<sup>1</sup>法人税等の金額が問題文で与えられている場合は除きます。

<sup>2</sup>同様の理由から、「繰延税金資産」と「繰延税金負債」も当てはまります。

<sup>3</sup>過去問の解説を見るのは必要最低限（なぜその数字になっているのか分からないときに計算式をちらりと見る程度）にしてください。くれぐれも解説をなぞるような形での勉強は避けてください。このような勉強は確かに「その問題」は解けるようになるのですが、全く応用が利かないので本試験では点数を取ることはできません。結果、「過去問では合格点が取れるのに本試験では不合格になる」という状況になってしまいます。

服しておくことが大切です。

### **理論問題が極端に解けない状態になっていないか**

理論問題は簿記2級までは全くなかった出題形式です。計算ができるのは大切なのですが、あまりにも理論問題を苦手にしてしまうと合格が遠のいてしまいます。

理論問題が極端に解けない状態である場合は「商業簿記・会計学」の「索引」を見て、意味が分からない言葉がないかチェックし、もしあれば該当ページを読み直すといった勉強が効果的です。

### **その回の問題が特別に難しいのではないか**

上記3つが当てはまらなくても18点に届かない場合は、その回の問題が特別に難しいことが考えられます。「特別に難しい回」の場合は過去問題集の総評に必ずその旨が書いてあるので、過去問題集の総評をチェックしてください。そして、その旨が書いてあればその回の過去問では18点は取らなくてもいいと考えてください<sup>1</sup>。

逆に、そういった旨が書いていなければ上記3つのどれかが当てはまると考えてまず間違いありません。もう一度厳しい目で上記3つをチェックしてください。

ちなみに、「きちんと理解していて」「計算力が十分にあり」「理論問題もそれなりに解答できる」場合は、19点から22点ほど得点できます。

自分に必要な復習をきちんと行い、18点を取れる力がついたと感じたら5に進みます。できればその日のうちに、遅くとも翌日には5に進んでください。

## **5. 「商業簿記・会計学」の過去問の2回目以降を解いていく**

1回目の過去問練習では仕訳だけを切っています。2回目以降はきちんと集計を行い、解答欄を埋めます。2回目以降に問題を解くときは次の2つを意識してください。

- 問題を解く時には必ず時間を計る
- 満点は取りにいかない

### **問題を解く時には必ず時間を計る**

時間を計ること自体は1回目と同じですが、今回は1回目よりもはるかに時間を重視します。時間内に解ききる必要はありませんが、時間をオーバーした場合は対策が必要です。2回目以降の過去問練習で、しかも満点を取りにいけないにも関わらず制限時間をオーバーする場合、次の原因が考えられます。

- 基本的内容で迷いが生じた

<sup>1</sup>おそらく本試験では大きな傾斜配点が入り、点数が高くでるはずですが。

- 実は解く必要がない問題を解きにいていた
- 計算力が不足している
- 自分なりの解答方法が身につけていない

### 基本的内容で迷いが生じた

基本的な内容が完璧に身につけていない場合、会計処理の方法に迷いが生まれて時間がかかることとなります。「時間がかかったけど解けたから大丈夫」ではなく、きちんと理解を深め、定着させておく必要があります。

### 実は解く必要がない問題を解きにいていた

1回目の過去問練習のときには「取りに行くべき18点」に含めていたけれど、2回目以降実際に解いてみると思ったよりも時間がかかる問題だったということがあります。その場合は、「取りに行くべき18点」そのものを見直す必要があります。

### 計算力が不足している

計算力が不足していれば当然時間はかかります。計算が複雑な問題になると、とたんに時間を多く取られる場合は計算力が不足していると考えてください。

### 自分なりの解答方法が身につけていない

簿記ではいくつかの解法が存在します。例えば次のようなものです。

- ボックス図（特殊商品売買、売価還元法など）
- 面積図（棚卸減耗費、商品評価損、外貨建有価証券など）
- 勘定連絡図（特殊商品売買など）
- ワークシート（退職給付会計など）
- タイムテーブル（連結会計など）

こういった解法は使いこなせば非常に便利です。ただ、使い方そのものが暗記になってしまっただけでは使いこなせないのも意味がありません。きちんと使いこなせていないと感じる場合、計算用紙（下書用紙）を分析して練習を繰り返してください。使いこなせるようになれば解答スピードが上がります。

こういったことを分析しながら解答スピードを上げていく意識が必要です。

## 満点は取りにいかない

2回目以降であれば、本来「捨問」に値する問題であっても得点できそうに感じる場合があります。もちろん18点までしか得点してはいけないというわけではありませんが、本試験では捨てるような問題まで取りに行くクセをつけてしまうと、過去問練習が「本試験

<sup>1</sup>計算が複雑であれば時間がかかるのは当たり前なので、多少時間がかかる程度であれば問題ありません。「大幅にかかる時間が増えた場合は計算力不足を疑ってください。

で合格点を取るための練習」ではなく「過去問で高得点を取るための練習」になってしまいます。

こうなってしまうと試験本番で取るべき問題が見えにくくなり、結果として時間配分のミスや精神的な乱れの原因となってしまいます<sup>1</sup>。なので本試験で捨問とする問題は過去問練習でも捨てるようにしてください。ただし、「最初から捨てる」と決め付けるのではなく「きちんと問題文を読み、『このレベルの問題は捨てるんだ』ときちんと意識してから捨てる」ことが大切です。

回によって違いはありますが、目安として 23 点以上（23 点含む）を取りにいくべきではないと考えてください。

### 18 点以上取れるようになったら【簿記革命】問題集と同様に解いていく

過去問練習は 18 点以上取れるようになるまでは毎日（可能であれば 1 日に何度でも）解いてください。もちろんただ解くだけではなく、18 点に届かなかった場合にはきちんと原因をつかんで復習することが大切です<sup>2</sup>。

繰り返し練習を行えば 18 点に届くようになります。18 点に届くようになれば【簿記革命】問題集と同じ復習ペース（8 ページ参照）で解くようにしてください。

## 6. 簿記革命 1 級の「工業簿記」が終了したら「工業簿記」の過去問を解く

簿記革命 1 級の「工業簿記」が終了したら、「工業簿記」の過去問を解きます。過去問練習の流れは「商業簿記・会計学」と基本的に同じです。違うところは次の 3 つです。これら以外は「商業簿記・会計学」に準じると考えてください。

- 簿記 2 級の「完璧」の水準
- 問題を解いていくときのポイント
- 工業簿記における「解法」

### 簿記 2 級の「完璧」の水準

簿記 2 級の過去問のうち第 4 問と第 5 問が工業簿記となっています。「完璧」とは具体的には次のような出来具合を意味します。

- 比較的容易な回の場合：30 分以内に満点
- 比較的難解な回の場合：40 分以内に 9 割以上

数回分解いてみた平均が「30 分以内」で「9 割以上」であれば簿記 1 級の過去問に挑戦で

<sup>1</sup>ここでいう精神的な乱れとは「過去問練習と本試験の違いが大きくなることで、いつもと違うとあせったり、集中力が切れたり、あきらめたりしてしまうこと」です。

<sup>2</sup>18 点に届かなかった理由に応じて「テキストに戻って復習する」「簿記革命問題集を解く」などを行ってください。



きるだけの基礎が身についていると言えます<sup>1</sup>。

## 問題を解いていくときのポイント

「商業簿記・会計学」の1回目の過去問練習では計算問題は仕訳だけを切りましたが、工業簿記の場合はきちんと解答欄を埋めるところまでやりましょう。

また、工業簿記は「商業簿記・会計学」に比べて「自分で求めた金額や数字を使って次の答えを求めていく問題」が多いので、大本の数字を間違えてしまうとそれから先の数字が全部不正解となって大量失点につながってしまいます<sup>2</sup>。こういったミスに特に気をつけることが大切です。

## 工業簿記における「解法」

工業簿記では「ボックス図」「面積図」「シュラッター図」といった解法の重要度が「商業簿記・会計学」よりも高いです。より意識して身につけておく必要があります。

## 7.簿記革命1級の「原価計算」が終了したら「原価計算」の過去問を解く

簿記革命1級の「原価計算」が終了したら、「原価計算」の過去問を解きます。過去問練習の流れは「商業簿記・会計学」や「工業簿記」と基本的に同じです。違うところは特にありません。

ただ、「原価計算」では現実でありそうな様々な状況設定がある問題が多いので、学習した内容がそのまま出題されることはほとんど皆無です。問題文に書かれている状況設定を正確に読み取って解答する必要があるため、応用する力が「商業簿記・会計学」や「工業簿記」と比べて格段に必要です。

### まとめ

- 過去問練習は最低でも過去10回分を5回解く。
- 簿記1級の過去問練習に入る前に簿記2級までの内容を完璧にし、簿記革命1級の目次をチェックしておく。
- 簿記1級では各科目の目標点数を18点に設定し、取るべき問題を取る意識で学習を進める。
- 18点に届かない場合はしっかりとテキストや問題集に戻って復習し、過去問の解説をなぞるような勉強はしない。

<sup>1</sup>もしこの条件に届かない場合、簿記2級の過去問を繰り返し解いてください。ちなみに、2回目以降は難易度に関わらず「25分以内」に「満点」が「完璧」の条件です。

<sup>2</sup>この傾向は「原価計算」にもあります。

### ～Column～簿記革命で学習した人は各科目 18 点を目標せばいい理由

簿記革命で学習した方が過去問練習を行う場合は、各科目それぞれ 18 点を目標せば十分です。これ以上の点数を目指す必要は特にありません。理由は 3 つあります。

- 4 科目とも 18 点以上であれば 80 点程度は期待できるから。
- 傾斜配点を考えると、過去問での配点よりも点数が高くなることが期待できるから。
- 【簿記革命】は過度に過去問に最適化していないので、過去問と同程度の点数が本試験でも期待できるから。

#### 4 科目とも 18 点以上であれば 80 点程度は期待できる

4 科目とも 18 点以上なら、最低でも 72 点は取れるということです。全ての科目が最低の場合で 72 点ということなので、実際にはもっと点数が高くなるのが期待できます。いくつかの科目で 20 点以上取れることも十分考えられるので、80 点程度は期待できます。

#### 傾斜配点を考えると、過去問での配点よりも点数が高くなるのが期待できる

簿記 1 級は「傾斜配点」によって採点されます。この「傾斜配点」では「多くの受験生が正解した問題には多くの点数が与えられる」「ほとんどの受験生が正解できなかった問題には点数はほとんど与えられない」といった形で配点が与えられます。

過去問題集に記載されている配点は傾斜配点は考慮されていないので、配点は厳しいものになっています<sup>1</sup>。実際の試験でも、【簿記革命】の学習スタイル、つまり「基本をしっかり身につけて重箱の隅をつつくような論点は勉強しない」という勉強をしている人は自己採点で 60 点台の前半だった方でもかなりの確率で合格されています。

【簿記革命】で勉強されている方は傾斜配点を味方につけることができるので、18 点を目標にしても低いということはないのです。

#### 【簿記革命】は過度に過去問に最適化していないので、過去問と同程度の点数が本試験でも期待できる

市販のテキスト（問題集）や資格学校のテキスト（問題集）など、世の中の多くのテキストが「過度に過去問に最適化」されています。「過度に過去問に最適化」というのは「過去に出題されたほとんど全ての論点がテキストや問題集に入っている」ということです。

簿記 1 級の試験問題には「重箱の隅をつついたような問題」「会計士や講師でも解けないような問題」が含まれています。本来はこういった問題は初見では全く手が出ないので、本試験では「捨問」として無視します。しかし、テキストや問題集にそういった「捨問」の内容が含まれている場合には、過去問を解くときにも解けてしまうので、過去問練習では比較的高めの点数を取ることができます。ですが、未来の本試験問題の「捨問」がテキストや問題集に含まれていることはないので、本試験ではこういった「捨問」は得点するこ

<sup>1</sup>難しい問題にも相応の点数が割り当てられているということです。

とはできません。

こういった理由から、「過度に過去問に最適化されたテキスト（問題集）」で勉強すると、「過去問では合格点が取れるのに、本試験では合格点が取れない」ということが起こることになります。こういった事情があるので「過度に過去問に最適化されたテキスト（問題集）」で勉強する場合には、「過去問では9割前後を目標にしておくことで、本試験でギリギリ合格する」といったスタンスで勉強していくことになります。

しかし、【簿記革命】は過去問に過度に最適化されていないので、過去の出題で捨問となるような論点は含まれていません。なので、過去問練習でも捨問は捨問として処理することになるので過去問練習と同じ程度の点数が本試験でも期待できます。

これらの理由から、18点を目標に設定して過去問練習をしても十分だと言えます。実際の試験の典型的なケースでは「目標最低得点72点+目標からのプラスのズレ8点+傾斜配点による加点6点-本番特有の緊張感によるミス8点=78点」といった形で合格することになります。